AIと授業

学校のAI、どう変わる？

次期学習指導要領は、学習指導要領として初めて「AIの適切な活用」を書く方向です（審議まとめ段階の案で、告示までに変わることがあります）。そもそも何が変わるのか、使っていいこと・いけないこと、小・中・高での違い、英語や各教科での使い方まで、かみ砕いてまとめました。

更新 **2026年11月4日**　出典 **審議まとめ（2026年10月5日）**

ひとことで言うと

ひとことで言うと

AIは便利な道具。でも、考えて決めるのは自分。その力を学校で育てる方向です。

たとえると

AIは「物知りだけど、ときどき自信満々にまちがえる先輩」のようなもの。相談してよいけれど、うのみにせず自分で確かめ、最後は自分で決める。その付き合い方を学校で練習するイメージです。

1. AIが情報を整理・要約してくれる時代だからこそ、意味の分かった「確かな知識」と、書く・話すで考えを表す「外化」を重視する。

2. 1人1台端末やクラウドなどのデジタル学習基盤は「活用が前提」。AIは発達段階やねらい、利用規約などをふまえて適切に使うもので、一律に義務付けるものではない。考える過程をAIに丸投げせず、出力をうのみにしないことが全教科の共通ルール。

3. 審議まとめでは、小学校の総合に「情報の領域」、中学校に「情報・技術科」、高校情報科の強化でAIを学ぶ方向が示され、国は生成

AIガイドラインを令和8年度中に改定するとしている（いずれも告示前の案で、今後変わりうる）。

まずは基本：AIと学校のギモン

生成AIってそもそも何？

たくさんのデータをもとに、文章や画像などの新しい情報を予測して作り出す技術です。便利ですが、今あるデータをもとに予測しているので、答えに誤りやかたよりがまじることがあります。子供は検索などを通して、すでに毎日のようにAIにふれています。

P248 資料(情技㉔)P153 資料(情技㉕)P154

なぜ今、学習指導要領でAIを扱うの？

AIが急速に広がり、知識を取り出したり情報を整理したりする仕事をAIが代わりにするようになってきたからです。いまの学習指導要領ではAIなどの新しい技術の内容がはっきり位置付けられておらず、学校ごとの差も大きいことが課題とされました。P7 P72

「AIの適切な活用」ってどういうこと？

授業のねらいに合うときに使うのが原則で、使うこと自体が目的ではありません。AIの答えも比べて確かめる対象とし、自分で考えて決めたことを自分の言葉で説明し、責任を持つことが基本とされています。発達の段階に合わせることも大切です。 P140 P282

「デジタル学習基盤」って何？

1人1台の端末、通信ネットワーク、デジタル教科書・教材、クラウドなどでできた「学びの土台」のことです。次期学習指導要領は、これがいつでも使えることを前提に書く方向です。ただし「デジタルかリアルか」の二者択一にはしないとされています。 P26

「外化（がいか）」って何？

書く・話す・作るなどで、頭の中の理解や考えを外に出すことです。外に出すことで、自分なりの理解が形になります。自分で考えずにAIの答えをそのまま使うと、この大事な過程が抜けてしまうため、外化を重視するとされています。 P28 P25

AIが何でも答えるのに、なぜ知識が必要なの？

AIにうまく質問するにも、AIの答えが正しいかを見分けるにも、その分野の知識が要るからです。最後に責任を持って決めるのも人間です。価値が下がったのは知識そのものではなく、意味の分からない丸暗記の方だと整理されています。 P9

使っていい？気をつける？任せない？

AIとのつきあい方を、信号の3色で整理しました。「原田英語からの提案」とあるものは、審議まとめの方向性をもとにした目安です。

子どもが生成AIを使うときの約束（どの場面でも）

- 学校や教育委員会が認めたサービスを、利用規約（年齢制限・保護者の同意など）にしたがって使う
- 授業では、先生が目的と使い方を決め、見守りながら使う
- 名前・写真・成績など、個人がわかる情報は入力しない
- 家庭で使うときは、保護者がサービスの利用規約と対象年齢を確かめる

文部科学省「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）」の、利用規約・年齢制限・保護者の同意、個人情報を入力しないことについての記述をもとにまとめました。

● 使ってよい場面

興味に合わせた英語の例文を作ってもらう

外国語で有効な例とされています。出てきた文をうのみにせず、確かめながら使えるよう先生が支えます。

P282

英語の会話練習の相手にする

会話練習はあくまで手段で、目標は人と人とのコミュニケーション。そこにつなげる使い方が原則とされています。

P282

自分で考えた後に、ちがう立場の意見を出してもらう

道徳で考えを多面的にする実践例があります。AIの答えを正解とせず、自分で考えた後に補助的に使うのが前提です。

P316 P317

生徒会の記録まとめやポスターづくりの手伝い

特別活動の事例として挙がっています。ただし、話し合って決めるのは子供たち自身です。

P362

先生が指導案や教材を練るときの相棒

次の学習指導要領は生成AIが読みやすい形のデータでも提供する方向で、指導案や評価計画を練りやすくなるとされています。

P21 資料(1-3-5)P10

● 気をつけて使う場面

検索結果の一番上に出るAIの要約

そのまま写す子供への指導が足りていない実態があるとされています。情報が確かかを確かめてから使います。

P26 P129

探究でAIから情報を集めるとき

見た目は立派でも力が育っていない「偽の熟達」のおそれがあります。もとの情報の発信者・時期・正しさを確かめます。

P330

AIにプログラムを書いてもらうとき

AIが作ったコードにも誤りが含まれることがあります。目的に合っているかを自分で確かめ、直す力が要ります。

P249

個人の情報や、AIが作った文章・画像

個人情報や著作権は「適切な取扱い」で学ぶ内容です。AIが作った文章や画像には著作権などの課題が生じる場合もあります。

P250 P298

小学生の利用や、長い時間の利用

AIなどが認知や行動に与えるリスクや長時間利用の影響に十分気を付けるとされています。頼りすぎず距離をとる力を育てます。

P74 資料(情技㉔)P153

● AIに任せてはいけないこと

その単元で育てたい力そのもの（要約・最初の感想・文章の組み立てなど）

国語では、単元で育てたい力に直結する場面でAIを不用意に使うことに
慎重であるべきだとされています。

P140

自分で考えていない成果物を出すこと

AIに頼って自分の考えを経ていない成果物は通用しないよう、口頭で説明させるなど評価の工夫が急ぎの課題とされています。

P26 P159

単純な英作文をAI翻訳ですませること

家庭学習の課題を、AI翻訳を提出すれば済むような出し方にしないよう留意が
必要とされています。

P282

最後の判断と決定

AIの提案を参考にしても、責任を持って決めるのは人間です。学級や生徒会で合意して決める主体も子供たちとされています。

P9 P362

体験や、人との協働の代わり

生活科ではICTは直接体験の代わりではないことが前提です。特別活動でもリアルな体験や協働を大切にし、効率化を目的にしません。

P209 P362

小・中・高で、AIとのつきあい方はどう違う？

小学校 総合に「情報の領域」ができ、体験しながらAIとの付き合い方の基本を学ぶ方向です。

01 総合に「情報の領域」

いまの小学校には情報を学ぶ決まった時間がなく、学校ごとの差が大きいとされました。次期は総合的な探究の時間に「情報の領域」を加え、
体験しながら情報技術を使う力を中心に育てる方向です。 P72 P74

02 4年生で「うのみにしない」姿勢

情報の受け取り方は3年から6年へ段階的に学ぶ案です。たとえば4年では、発信する体験を通して、AIの出力も含めて情報をうのみにしない姿勢を育てる例が示されています。 P251

03 AIの特徴とリスクを知る

AIは今あるデータをもとに予測して作るので誤りやかたよりがあること、頼りすぎず自分で距離をとること、最後は人間が判断することなどを学ぶイメージが示されています。 資料(情技㉔)P153

04 小さな探究で使ってみる

「生成AIの特性やリスクをふまえた作品づくり」「デジタルの良い面と悪い面をふまえたマイルールづくり」などを小さな探究の単元で体験する例が示されています。一律に行うものではありません。 P251

授業の場面の例（原田英語からの提案）

- 先生が画面でAIに質問して見せ、その答えを図鑑や教科書と比べて「合っているところ・ちがうところ」をみんなで探す。
- 学級で使う端末の「マイルール」を、便利な面と困る面を出し合ってつくり、学期ごとに見直す。
- 感想や作文は、まず自分の言葉でノートに書く。AIは使わず、友達と読み合って考えを広げる。

家庭では（保護者の方へ・提案）

- AIや動画で見た情報について「本当かな？どこで確かめられる？」と、子供と一緒に調べてみる。
- 端末やAIを使う時間・場所の約束を、子供と話し合って決める。

小学校の先生へのページ

中学校 技術分野が「情報・技術科」へ。AIの仕組みとリスクをしっかり学ぶ方向です。

01 新しい教科「情報・技術科」

技術・家庭科の技術分野を、時間を確保して「情報・技術科」とし、家庭科は独立した教科にする方向です。コンピュータやネットワークの仕組み、データの活用などを大きく充実させます。 P74

02 仕組みを知り、情報を吟味する

AI・ネットワーク・データなどの基本的な仕組みを知り、偽・誤情報やフィルターバブルなどもふまえて、情報の信頼性を批判的に確かめる学びが例示されています。 P253

03 AIのリスクと人の判断

AIの出力には誤りやかたよりがありうるので人の判断を大切にすること、権利の侵害や悪用、誤情報のリスクをふまえて使うことなどを学ぶイメージが示されています。 資料(情技㉔)P153

04 各教科でも「考えた後に」使う

道徳では、自分で考えた後に補助的にAIを使い、AIの答えを正解とせず吟味することが留意点とされています。生徒会の記録まとめなど、特別活動での活用例も挙がっています。 P317 P362

授業の場面の例（原田英語からの提案）

- 同じ質問を言い方を変えてAIに聞き、答えがどう変わるか、なぜ変わるのかを班で話し合う。
- 道徳で、まず自分の考えをノートに書き、その後で先生が示すAIの「別の立場の意見」と読み比べる。
- 英語で、自分の好きなことについての例文をAIに作ってもらい、辞書や先生と確かめてから友達に話す。

家庭では（保護者の方へ・提案）

- 宿題でAIを使ったときは「どこをAIに手伝ってもらい、どこを自分で考えたか」を聞いてみる。
- SNSやネットで話題の情報を、家族で別の情報源と比べてみる。

中学校の先生へのページ

高校 情報科を強化。卒業までに、データとAIを使いこなす基礎を全員に育てる方向です。

01 全員に「使いこなす」基礎

大学などの数理・データサイエンス・AI教育とつなげ、進学しない人も含めた高校卒業生全員が、日常や仕事で使いこなせる力（リテラシーレベル）を身に付けられるよう内容を充実させる方向です。 P74

02 情報Ⅱに「AI」の項目

情報Ⅱに、データサイエンスを大きく充実させる項目と、AIを単独で扱う項目を新しく立てる方向です。情報Ⅰは主に使う人の視点、情報Ⅱは作る人・提供する人の視点も含めて学ぶイメージです。 P255 資料(情技㉔)P153

03 AIを使っても「自分の考え」を確かめる評価

AIに頼った成果物が通用しないよう、口頭試問を取り入れる、ブラウザを使えないテストモードで根拠を書かせる、作る過程も評価に加えるといった工夫が考えられるとされています。 P26 P159 P299

04 探究では「過程」と「口頭」を重視

総合的な探究の時間でAIを使う場合、もとの情報を確かめることに加え、試行錯誤の記録、その場で説明して質問に答えること、現場での体験などを重視する対応が考えられるとされています。 P330

授業の場面の例（原田英語からの提案）

- レポートは下書きやメモ、AIとのやりとりも添えて出してもらい、最後に2分間の口頭説明と質疑を行う。
- 情報科で、AIが出した分析結果を別のデータや条件で確かめ直し、結果がちがう理由を考える。
- 探究で、AIから得た情報について、もとの発信者・日付・根拠を表にまとめてから使う。

家庭では（保護者の方へ・提案）

- レポートや進路調べでAIをどう使ったか、どこを自分で判断したかを、ふだんの会話で話題にしてみる。
- AIの意見は「参考の一つ」として聞き、最後は自分で決めることを大事にする声かけをする。

高校の先生へのページ

AI時代に、学校で育てる力

01 確かな知識

意味が分かり、ほかの知識とつながった知識です。AIの答えが正しいかを見分ける土台になります。丸暗記ではなく、自分で考える努力を通して身に付けることが大切とされています。 P9

02 自分の言葉で表す力（外化）

書く・話す・作るで考えを表し、人と共有して対話する力です。自分で考え、判断し、表現したことを自分の言葉で説明し、責任を持つことが基本とされています。 P25 P28 P140

03 情報を見極める力

真偽の分からない情報を自分で確かめ、必要なら判断を保留する力（メディアリテラシー）です。筋道立てて考え、自分の考えを振り返る「クリティカル・シンキング」が支えになります。 P248

04 AIを使いこなす力

ただの操作の技能ではなく、AIを適切かつ効果的に使って、問題を見つけて解決したり、自分の考えをつくったりする力です。発達の段階に応じて学ぶ方向です。 P248

05 プログラミング的思考

目的を考え、AIへの指示やプログラミングで解決策を形にし、できたものを批判的に確かめて直し、責任を持って使うまでの考え方として捉え直されています。 P249

図解アニメで見る

テーマ別・6枚

AIと学びはどう変わる？

再生する →

全体像・12枚

次期学習指導要領 全体像

再生する →

全体像・6枚

いつから？を図で

再生する →

© 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ（https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）｜AI×授業 大特集｜研修・校内での印刷・配布OK（連絡不要）

次期学習指導要領とAI：基本の考え方

AI時代でも知識の価値は下がらない

AIに指示や問いを出すにも、AIの答えが正しいかを見分けるにも、その分野の知識が必要です。AIの提案を参考にしても、最後に責任を持って決めるのは人間です。価値が下がったのは、意味の分からない丸暗記や、知識の量だけを競うような学び方の方だと整理されています。 P9

「確かな知識」を身に付ける

知識と知識をつなげ、意味が分かった状態で身に付けた知識を「確かな知識」と呼びます。自分で頭を使って努力する過程を通して、体にしみこんだ知識です。AIの時代には、こうした知識を考える力や探究に生かすことがこれまで以上に必要だとされています。 P9 P76

AIが知識の整理を代わりにする時代だから「深い学び」

知識を取り出したり大量の情報を整理したりする仕事は、AIに置きかわりつつあります。そのため、概念を深く理解し、自分で課題を見つけて現実の問題に取り組む力がますます大切になり、「深い学び」を進めることが急ぎの課題とされています。 P7

「外化」を重視し、AIの出力をそのまま使わない

書く・話す・作るなどで自分の理解や考えを表に出すことを「外化」といいます。自分で考えずにAIの出力をそのまま使うと、学習の大事な過程が抜け落ちてしまいます。外化を大切にし、読む・聞く（内化）と行き来させることが、こうした弊害を防ぐ鍵とされています。 P28 P25

言語能力と情報活用能力は支え合う

言葉の力の上に情報技術を使うと、考えやコミュニケーションを大きく広げられます。逆に、言葉で表す活動を欠いたまま情報技術を使うと、中身のない情報の寄せ集めになるおそれがあります。例として「言語による外化なしにAIが生成したものをそのまま使う」ことが挙げられています。 P25

AIの情報から的確に選び、責任を持って決める「人間ならではの力」

AIが処理した情報には誤りや偽の情報も混ざります。確かな知識を使い、他の人と体験を積み、自分が何をしたいかを持って、AIが出す情報の中から的確に選び、責任を持って意思決定する力が大切だとされています。 P25

デジタルの力も使ってリアルな学びを支える

「紙かデジタルか」「デジタルかリアルか」と二者択一で考えず、デジタルの力も最大限使って一人一人の豊かな学びを充実させる、というバランス感覚が基本です。負の側面に気を付けながら、さらに効果的に使うことを目指します。 P8 P26

デジタル学習基盤を総則に位置付ける

デジタル学習基盤とは、1人1台端末やクラウドなどでできた学びの土台のことです。総則で、多様な子供を包み込む学習環境をつくるもの、先生の道具であると同時に子供自身の学習道具であるもの、と意義を示す方向です。各教科でも、デジタル学習基盤がいつでも使えることを前提に書き方を考えます。 P25 P26 P27

AIに頼った成果物が通用しない評価の工夫

検索結果の一番上に出るAI要約をそのままコピーする子供への指導が足りていない実態があります。情報が確かかを確かめる技能を高め、最後の評価の段階で、自分で考えていない成果物が通用しない工夫が急ぎの課題です。例として、口頭試問を取り入れる、テストのときはブラウザを使えない設定にして自分の考えを根拠付きで書かせる、が挙がっています。 P26 P159

良い例と「深い学びに繋がりにくい例」の両方を発信

AIを含む情報技術の使い方が深い学びにつながるよう、国は良い事例だけでなく、深い学びにつながりにくいと考えられる事例も示し、授業者が参照しやすい取組を進めるとされています。技術の変化への対応は、指導要領や解説に「別にガイドラインや指導資料で示す」と書いておくべきだとされています。 P26 P248 資料P77

情報活用能力の3つの要素

情報活用能力は、①情報技術の「活用」（課題を解決し新しい価値をつくる力）、②「適切な取扱い」（リスクを判断しルールを守り責任を考えて行動する力）、③「特性の理解」（仕組みを科学的に理解する力）の3つで整理されます。①が中心で、②③がそれを支えます。どの学校段階でもバランスよく育てます。 P73

小・中・高で情報教育の「要」をつくる

審議まとめでは、小学校は総合的な探究の時間に「情報の領域」を加え、中学校は技術分野を「情報・技術科」とし、高校は情報科（情報Ⅰ・Ⅱ）をさらに充実させる方向が示されています。小学校では体験を重視し「活用」を中心に、中学校以降は適切な取扱いや特性の理解を体系的に高めるとされています。小学校でも、AIなどの

負の側面や、認知や行動への
リスクに十分留意すると
されています。 P74

高校卒業までにAIを「使いこなす」基礎

大学などで進む数理・
データサイエンス・AI教育と
つながるよう、高校では
データサイエンスやAIの内容を
強化します。進学しない人も含めた
高校卒業生全員が、数理・
データサイエンス・AIを日常生活や
仕事で使いこなせる力
（リテラシーレベル）を身に
付けられるようにすると
されています。 P74 P242

「AIを使いこなす力」はただの操作技能ではない

AIは学習で考えを広げたり
深めたりできる一方、
特性やリスクを知らずに使うと、
頼りすぎや学習過程の省略で
学習効果が下がるおそれが
あります。そこで「AIを
使いこなす力」を、AIを適切かつ
効果的に使って問題を見つけて
解決したり、自分の考えを
つくったりする力と捉え、新しい
教科・領域で発達段階に応じて
学ぶ方向が示されています。 P248

プログラミング的思考の捉え直し

言葉でAIに指示してプログラムを作れる時代になっても、AIが作ったコードには誤りがあることもあるので、プログラミングの学びは不要になりません。目的を考え、AIへの指示やプログラミングで解決策を形にし、できたものを論理的・批判的に評価・改善し、責任を持って使うまでを「プログラミング的思考」として捉え直し、小・中・高で育てます。 P249

技術の進歩に素早く対応する仕組み

情報技術は変化がとても速いので、学習指導要領には大きな枠だけを書き、技術の進み具合に合わせてAIの利活用ガイドラインを機動的に改定し、解説もタイミングよく一部改訂していくとされています。国は少なくとも年1回くらい、指導の手引きや授業動画などの教材を更新するとされています。 P75 P243

生成AIガイドラインを令和8年度中に改定

学校現場で生成AIを適切に使うための参考資料「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン」を、学習指導要領の改訂を待たずに令和8年度中に改定し、研修や環境整備も行うとされています。教科ごとの効果的なAIの使い方などの具体的なポイントも、改訂を待たずにガイドライン等で

デジタル学習指導要領はAIで読みやすい形に

次の学習指導要領はウェブサイトで提供される「デジタル学習指導要領」とし、生成AIが読みやすい形式のデータも提供する方向です（具体的な機能は今後検討）。先生はAIを使って指導案・評価計画案・教材などを練りやすくなるとされています。今の紙やPDFの形式は、AIに読み込ませて使うのに向いていないことが課題と

示すことになっています。

P248 P262 P89 資料P72 資料P77 資料P80

して挙げられています。

P21 資料P10

AIやSNSの時代だからこそ「好き・得意」と探究

AIなどで決まった仕事が置きかわる中、独自の発想や視点が価値を生むようになっています。また、AIやSNSから「最適解」が次々に与えられ受け身になりやすい時代なので、自分の問いを原動力に新しい意味や価値をつくる力を学校で意図的に育てることが大切だとされています。 P9 P76

AIと民主主義：分断を防ぐ力

SNSを通じた偽・誤情報の広がりや、AIが人の認知や判断に与える影響が、民主主義社会の分断を招きかねない課題になっています。デジタルの負の側面を乗り越え、自分の意見を持ち、異なる考えの人と対話し合意できる「民主的で持続可能な社会の創り手」を育てることが重視されています。 P4 P10

教科の枠を超えた
クリティカル・シンキング

情報の吟味（クリティカル・
シンキング）を働かせて
メディアリテラシーや情報モラルを
育てる方向で、情報教育を大きく
改善します。算数・数学科や
理科でもクリティカル・
シンキングの観点から内容を
検討し、道徳科ではAIが引き起こす
道徳的課題と向き合うことを
重視しており、相乗効果が
期待されています。 P11

先生がいまからできること

- [ ] **いま** AIに頼った成果物が通用しない評価の工夫（口頭で説明させる等）が急ぎの課題とされています。できる所から試せます。 P26 P159
- [ ] **いま** 国は生成AIガイドラインを、改訂を待たず令和8年度中に改定するとしています。改定版が出たら校内のルールを見直します。 P262 資料(1-7-3-6)P77
- [ ] **告示まで** 国はAI活用の良い例と、深い学びにつながりにくい例を、改訂を待たずにガイドライン等で示すとしています。自分の授業と照らします。 P26 P248
- [ ] **移行期間** 小学校は令和10年度、中学校は令和11年度から、「情報の領域」「情報・技術科」を段階的に先行実施できる方向です。 P262

- [ ] **移行期間** 国が授業でそのまま使える動画つき教材や研修動画を用意し、教材は少なくとも年1回程度更新するとされています。 P262 資料(1-7-3-9)P80

- [ ] **全面実施** 小学校は令和12年度、中学校は令和13年度からの想定です。高校は令和9年度末に告示予定です。ガイドラインはその後も必要に応じ改定されます。
P38 P51 P75 資料(1-7-3-9)P80

チェックはこの端末のブラウザだけに保存されます。

英語の授業でのAI活用（いちばん詳しく）

英語は、審議まとめの中でAIの使い方がもっとも具体的に書かれている教科です。
活用パターン12種・授業プラン12本・先生のプロンプト例10本・クラスのAIルールをまとめました。

中

例文ジェネレーター

習った文法や表現を、自分の好きなこと（部活動、趣味、好きな音楽など）に合わせた例文にして確かめます。

中

会話の練習相手

AIの会話アプリを相手に、決めた話題について英語でやり取りし、話す量を増やします。

全

発音・スピーキングの見直し

音声入力（文字起こし）や読み上げ機能で、自分の発音がどう聞き取られるかを確かめたり、モデルの音声をまねたりします。

高

ライティングのフィードバックと書き直し

自分で書いた英文に対して、誤りの指摘や改善の提案を受け、書き直しに生かします。

全

読み物のレベル調整

先生が書いた英文を、語数や使う語をしぼって、いくつかの難しさに書き換えます。多読用の読み物や、領域統合の活動の素材に使います。（審議まとめに具体例の記載はなく、外国語でのAIの適切な活用の方向性をふまえた編集部の提案例です）

中

AI翻訳との比べ読み

自分で書いた英文や考えた言い方と、AI翻訳の出力を比べ、違いの理由を考えます。

英語×AI 完全ガイドへ　AI授業プラン12本

現状の課題：AI時代に英語を学ぶ動機が弱まっている

AIで手軽に高精度の翻訳ができる中、AIが当たり前の社会を前提に、外国語を学ぶ本質的な意義を考え直す必要があるとされています。英語が「好き」な子供の割合が減るなど、学ぶ動機が弱まっているという指摘もあります。P277

現状の課題：AI活用の格差

外国語学習向けのAIや汎用型AIの発展が見込まれる一方、AIの活用が学習指導要領に位置付けられていないことで、学校ごとの活用の格差が学習の「量」と「質」の差につながることが心配されています。P277

AIに代替されるべきでない力を育てる

外国語を学ぶ本質的意義の2つの柱

①「言葉、文化、コミュニケーションへの深い理解を

AI技術が予想を超える速さで
進むことをふまえ、「AIに代替される
べきではない、人間が大切に
すべき資質・能力」を育てる
観点から、本質的な意義を整理し、
見方・考え方・目標・内容に
反映させます。 P278 資料P14

育むこと」、②「自分の考えが
磨かれて思考が深まるとともに、
人間関係が豊かになること」の2つの
観点で整理し、見方・考え方も
これをふまえて整理します。
資料編では、人間同士のリアルな
コミュニケーションでは、翻訳や
AIを介する場合より得られる情報が
格段に広がることなども
挙げられています。
P278 P279 資料P14

全教科のAI活用の記述

審議まとめで、AIやデジタル学習基盤についての記述がある教科等をまとめました。

国語

生成AI時代に「人間ならではの言葉の
力」を

7項目 →

社会・地理歴史・公民

生成AIやSNSの時代に、情報の真偽を
見極める力

8項目 →

算数・数学

生成AIの時代にこそ数学を
学ぶ意味がある

5項目 →

理科（理数を含む）

生成AIとデマ・フェイクニュースの
時代の科学的な素養

3項目 →

生活

AIで代替できない「実感を伴う知」を育む教科

3項目 →

芸術（音楽・図画工作・美術・書道等）

AIの進化の中での芸術の意義

3項目 →

家庭

生成AIなどの特性をふまえた情報収集・活用

3項目 →

情報・技術、情報（小学校「情報の領域」を含む）

AIの可能性とリスクの両方を学ぶ

10項目 →

体育・保健体育

AI時代だからこそ体を通して学ぶ意味

3項目 →

外国語活動・外国語

AI時代に外国語を学ぶ意味を再定義

2項目 →

産業教育（専門教科）

職業に関する全ての教科でAI・データサイエンスを

4項目 →

道徳

AIが新しい道徳的課題を生んでいる

4項目 →

総合的な探究の時間（総合）

AIが答えを出す時代の「探究」の意義

6項目 →

特別活動

「生成AI時代の主権者」を育てる

3項目 →

総則（日本語指導・個別の特別の教育課程などを含む）

総則にデジタル学習基盤の意義と「個に応じた学習過程」

4項目 →

特別支援教育

デジタル学習基盤は合理的配慮の土台

3項目 →

注意点・リスク

AIの出力をうのみにしない

AIの出力には誤りやかたよりが含まれることがあります。小学4年生でAIの出力を含め情報をうのみにしない姿勢を育て、外国語や道徳でもAIの答えを正解として扱わず吟味することが求められています。

P251 P282 P317 資料P153

AI要約のコピー＆ペースト

検索結果の一番上に出るAI要約を、よく考えずにそのまま写す実態があり、適切な指導がされていないことが課題とされています。

P26 P129 P146

学習過程の省略（認知的オフロード）

自分で考えずにAIの出力を使うと、学ぶのに必要な過程が抜け、頭を使う努力がされなくなります（過度な認知的オフロード）。AIへの過度な依存とともに、学習効果を下げるリスクとされています。

P9 P28 P72 P248

「偽の熟達」と負の影響

AIを使った探究が一見高度に見えても、実際には力が育っていない「偽の熟達」のおそれがあります。認知的負荷の低下、記憶・理解の弱化、批判的思考の低下、メタ認知の不正確さといった負の影響の可能性も議論されています。 P330

AI翻訳を提出すれば済む課題

外国語の家庭学習で、単純な英作文など、AI翻訳を提出すれば済む出し方をしないよう留意が必要とされています。 P282

考える・表現する中心部分をAIに任せない

国語の要約・初発の考え・構成づくり、芸術の表現の過程など、その授業で育てたい力に直結する場面では、AIを不用意に使うことに慎重になる・安易に委ねないことが求められています。 P140 P221

直接体験・リアルな協働の代わりにしない

生活科ではICTは直接体験の代わりではないことが前提です。体育では実際に体を動かし仲間と関わる活動、特別活動ではリアルな体験や協働を重視し、効率化を目的にしないことが求められています。

P209 P273 P362

偽・誤情報と社会の分断

SNSを通じた偽・誤情報の拡散、フィルターバブルやエコーチェンバーによる価値観のかたより、AIが人の認知や判断に与える影響が、民主主義社会の分断を招きかねないとされています。生成AIの発展でデマやフェイクニュースも広がりやすくなっています。

P4 P72 P183 P236

発達段階への配慮

生成AIを含むICTは発達段階をふまえて使うことが原則とされ、外国語などでも「発達の段階に応じたAIの適切な活用」とされています。小学校の情報教育でも、AIなどの負の側面や、認知・行動へのリスク（長時間利用の影響を含む）に十分留意するとされています。

P74 P140 P278 P282 P330

個人情報・著作権

情報の「適切な取扱い」には、個人情報・著作権やAIの適切な利用が含まれます。AIが作った文章や画像には著作権などの課題が生じる場合があり、体育・保健では体や健康の情報の扱いに注意が必要です。ガイドラインでも、子供にプロンプトへ氏名や写真などの個人情報を入力させないよう留意するとされています。また子供が生成AIを使う場合は、教育委員会の方針に基づき、年齢制限など利用規約の条件を校長・担当教師が確認し、必要に応じて保護者の

理解を得たうえで、教師の適切な
指導監督の下で使わせることが
必要とされています。

P250 P273 P298
ガイドラインVer.2.0 P19

格差を広げない

デジタル技術の進展を格差
（デジタルデバイド）につなげない
視点が重要とされています。
デジタル学習基盤の活用には
地域間・学校間の差が大きく、
外国語ではAI活用が
位置付けられていないことによる
活用格差も心配されています。

P4 P25 P72 P277

AIが作ったコードにも誤りがある

AIが生成したコードやシステムには
誤りが含まれる場合があり、AIに
任せても検証・改善と責任ある
活用のためには仕組みの理解が
必要とされています。 P249

決めるのは子供・人間

特別活動では合意形成や意思決定の
主体はあくまで子供です。AIの提案を
参考にしても、責任を
持って判断し決めるのは人間の
役割とされています。 P9 P362

技術の変化が速い

情報技術は変化が速く、内容が
古くなる可能性があります。国語・
社会の考え方は「当面の基本的
考え方」とされ、道徳科のAIに
関する解説も必要に応じて見直すと
されています。

P140 P159 P314 P75

文部科学省の生成AIガイドライン

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）

公表：2024-12-26（令和6年12月26日、文部科学省初等中等教育局）

公式ページ

- **位置付け：一律に禁止も義務付けもしない参考資料**：教職員や教育委員会を主な読み手とする、学校での適切な生成AIの使い方の参考資料です。学校での生成AIの利用を一律に禁止したり義務付けたりするものではありません。令和5年7月の暫定的なガイドラインを改訂したもので、今後も必要に応じて改訂する想定とされています。（本体P4）
- **人間中心の利活用**：生成AIは使い方によって人間の能力を補い広げる道具になりえます。出力は「参考の一つ」「最適解とは限らない」と認識し、最後は人間が判断し、成果物に自分で責任を持つのが基本姿勢です。（本体P7）
- **使うこと自体を目的にしない**：子供の学びでは、学習指導要領の資質・能力の育成につながるか、教育活動の目的に効果的かを吟味して使い、生成AIを使うこと自体を目的にしてはならないとされています。体験活動とICT活用のバランスにも留意します。（本体P7）
- **教師の役割とAIリテラシー**：教師と子供の人格的な触れ合い、指導計画、丁寧な見取りといった教師の役割は、生成AIが社会インフラになる時代にもっと重要になるとされています。教師も生成AIの仕組みや特徴を理解する一定のAIリテラシーが求められます。（本体P7）
- **生成AIをふまえた情報活用能力の育成強化**：生成AIの仕組みの理解や学びへの生かし方を各教科等で意識的に育て、情報モラルを含む情報活用能力の育成を一層充実させます。偽情報の増加などもふまえ、情報の真偽を確かめる方法（ファクトチェック）も学ぶことが望ましいとされています。（本体P8〜9）
- **共通して押さえる5つのポイント**：①安全性を考慮した適正利用（年齢制限など利用規約の確認）、②情報セキュリティの確保、③個人情報やプライバシー、著作権の保護、④公平性の確保（バイアスへの留意）、⑤透明性の確保と関係者への説明責任、の5つです。（本体P10〜11）

- **教職員の校務での利活用**：出力の適切さを判断できる範囲で使うことを前提に、授業準備や文書のたたき台作成など校務で積極的に使うことは有用とされ、働き方改革につながることが期待されています。私用アカウントや許可のない私用端末は使わず、成績情報など重要性の高い情報は原則としてプロンプトに入力してはならないとされています。（本体P13〜15）
- **子供が学習で使う場面**：「生成AI自体を学ぶ場面」「使い方を学ぶ場面」「各教科等の学びで積極的に使う場面」などが考えられるとされています。小学生が直接使うことには、発達の段階をふまえたより慎重な見極めが必要で、教師が生成AIとの対話を見せるなどして学ぶことが例示されています。（本体P17）
- **適切と考えられる例・不適切と考えられる例**：誤りを含む出力を教材に限界に気付く、議論を深めるために途中段階で使う、英会話の相手にするなどが例示されています。一方、情報モラルが育つ前に自由に使わせる、コンクールやレポートに生成物をほぼそのまま出す、詩や俳句・美術など感性を発揮させたい場面で安易に使わせる、定期考査や小テストで使わせる、評価を生成AIの出力だけで行う、などは不適切と考えられる例とされています。（本体P18）
- **課題・評価での留意事項**：レポートなどでは評価の視点をあらかじめ決める、発表など自分のものになっているか確かめる機会を設ける、生成AIとのやりとりを資料として添付させる、使ったツール名・プロンプト・日付などを明記させる、などが考えられるとされています。保護者への情報提供も重要です。（本体P20）
- **子供の個人情報の保護**：子供が使う場合は、プロンプトに氏名や写真などの個人情報を入力させないよう留意するとされています。入力を学習させない設定（オプトアウト）が可能なサービスではその設定を使うことなども考えられています。（本体P19）
- **教育委員会の役割**：教育委員会が制度設計や方向性を示すことが重要で、学校ごとの実態に応じた柔軟な対応が必要とされ、一律に禁止・義務付ける硬直的な運用は望ましくないとされています。研修の実施や、フィルタリング・ログの確認など実態に即した対策も求められています。（本体P21〜22）

改定の予定：審議まとめ本体P262・資料編m2 P72／P77（「情報活用能力の抜本的向上を支える指導体制改善プラン」令和7年9月25日作成・令和8年7月30日時点）：本ガイドラインを、学習指導要領の改訂を待たずに令和8年度中に改定し、周知・研修・環境整備を行う。資料編m2 P80のロードマップでも「AIガイドラインの改定 R8年度中」、その後「必要に応じて随時改定」。審議まとめ本体P75は、技術の進展に応じAIの利活用ガイドラインを機動的に改定するとし、P248は、各教科等での効果的なAIの活用例や深い学びに繋がらない例を含む具体的な利活用のポイントを、改訂を待たずにガイドライン等で示すとする（P89にも記載）。なお、文部科学省の公式ページ（2026年11月1日確認）で公開されている現行版はVer.2.0で、改定版はまだ掲載されていない。

先生の仕事（校務・授業準備）でのAI

デジタル学習指導要領を生成AIに読ませて授業づくり

次の学習指導要領は生成AIが読みやすい形式のデータでも提供する方向で、AIを使って指導案・評価計画案・教材などを練りやすくなります。資料編には「学習指導要領を読ませた生成AIも使って単元計画や評価基準等を練ろう」という授業づくりの流れの例があります。 P21 資料P10

時間割や授業時数の計算の負担軽減

調整授業時数制度の運用で、教務担当の先生に時間割や授業時数の計算の負担が生じうるため、校務支援システムやクラウドツール、AIの活用で負担を軽くする取組が重要とされています。 P57

カリキュラム・マネジメントでの過度な負担を避ける

カリキュラム・マネジメントでは過度な負担を避ける視点も重視し、学習指導要領の表形式化・デジタル化の効果や、AIを含むデジタルツールの活用の可能性も含めて考えるとされています。 P83

高校入試の採点などでのAI活用

高校入学者選抜の採点などで、AIを含むデジタル技術の活用や負担軽減の取組を促進すべきとされています。 P86

AIによる自動採点・AIドリル

算数・数学の効果的なICT活用例として、AIによる自動採点や、デジタル教材・AIドリルの効果的な活用などが挙げられています。 P177

不登校の子供の指導計画づくりに生成AI

不登校児童生徒に係る特別の教育課程の指導計画について、作成の負担を減らし質を高める観点から、生成AIの活用も含めて検討するとされています。 P375

特異な才能のある子供への相談支援・情報共有

指導計画づくりの負担を減らし質を高めるため、相談支援で生成AIを補助的に有効活用することも検討すべきとされています。オンライン指導の録画を生成AIなどで要約し、担任が簡単に確認できるようにする方法も考えられるとされています。 P396 P397

道徳で教師がAIに異なる立場の意見を示させる

教師が適切なタイミングでAIに異なる立場の意見を示させることで、考えを多面的・多角的にする工夫が例示されています。 P316

AI時代の英語の先生の役割

授業デザイン、子供の学ぶ意欲を高めること、自律的な学習者を育てる学び方の指導がより重要になるとされています。国は大規模なオンライン研修や、授業でそのまま使える動画・資料の提供を行うとされています。 P285

国による教材・研修とガイドラインの改定

国は、先生が授業でそのまま使える授業動画を含む教材を作り、少なくとも年1回程度更新します。研修コンテンツの提供や、生成AIガイドラインの改定（令和8年度中）も行い、先生の負担を減らしながら最新の内容を教えられるようにするとされています。

P74 P75 P89 P262 資料P72

日本語指導のガイドライン

外国人児童生徒などの日本語指導について、AIやオンラインの効果的な活用方法を含む指導内容・方法のガイドラインを令和8年度中に策定する予定とされています。 P53 P97

AIについての、よくある誤解

Q AIがあれば、もう知識を覚えなくていい？

A そうではありません。AIに問いを出すにも、答えの正しさを見分けるにも知識が要ります。審議まとめは、知識の価値が下がったのではなく、意味の分からない丸暗記の価値が下がったと整理しています。 P9

Q 次期学習指導要領では、どの授業でもAIを使わなければならない？

A そうではありません。授業のねらいに合うときに使うのが原則とされ、育てたい力に直結する場面では不用意に使わないよう慎重さも求められています。使うこと自体が目的ではありません。 P140 資料(情技㉕)P154

Q 学校ではAIは禁止になる？

A 禁止の方向ではありません。端末などがいつでも使えることを前提にし、外国語でも発達段階に応じたAIの適切な活用を書きこむ方向です。うのみにせず、頼りすぎないことを学びながら使う考え方です。 P26 P282 資料(情技㉔)P153

Q AIがプログラムを書けるから、プログラミングの学習はいらない？

A いらなくなるわけではないとされています。AIが作ったコードには誤りもあるため、目的に合わせてAIに指示し、できたものを確かめて直す力が一層大切になり、小・中・高で育てる方向です。 P249

Q AIが文章を作れるから、作文や手書きの練習は減る？

A むしろ、自分の考えを書く・話す「外化」が重視されています。国語では要約や最初の感想を書く場面などでAIを不用意に使わないよう求められ、小学校では手書きの書写も丁寧に指導する方向です。 P28 P140 P141

Q AIの細かい使い方は、学習指導要領に全部書かれる？

A 技術の変化が速いため、学習指導要領には大きな枠だけを書き、具体的な使い方はガイドラインなどで示して、技術の進み方に合わせて改定していく方向です。 P75 P248

保護者の方へ

家庭でのタブレットやAIとのつきあい方、学年ごとにできることは保護者向けのページにまとめています。

保護者は何をすればいい？ 保護者の方へ（トップ）

AIの用語

デジタル学習基盤

1人1台端末やクラウド環境などの情報機器・ネットワーク・ソフトウェアなどでできた一連の学習の土台。端末、通信ネットワーク、周辺機器、デジタル教科書・教材、CBTシステム（MEXCBT）、教育データ利活用、情報セキュリティの7つの要素で構成される。 P26

外化

書く・話すなどの活動を通じ、知識の理解や頭の中で考えたことを表に出すこと。読む・聞くなどの「内化」と行き来させて、自分なりの意味理解をつくる。 P28 P281

認知的オフロード（過度な）

考えることを道具に任せすぎて、学ぶために必要な頭の努力がされなくなること。AIの出力をそのまま使うことによる「学習過程の省略」として注意されている。 P28 P72 P248

確かな知識

意味が分かり、他の知識とつながって構造化された知識。自分で考える努力を通して身体化された知識で、思考や探究に生かせる。 P9

記号接地

言葉や記号が、体験や実感と結びついて意味をもつこと。「確かな知識」は記号接地した知識でもあるとされる。 P9

情報活用能力の3要素

①情報技術の「活用」、②情報技術の「適切な取扱い」、③情報技術の「特性の理解」。①が中核で、②③がそれを支える。 P73

情報の領域

小学校の総合的な探究の時間に新しく加わる領域。総合を「探究の領域」と「情報の領域」の2つで構成し、情報活用能力を探究の土台として育てる。 P74 P77

情報・技術科

中学校の技術・家庭科の技術分野を独立させてつくる新しい教科。情報の技術を大幅に充実させる（家庭科は独立した教科になる）。 P74

ミニ探究ユニット

「情報の領域」で、情報スキルと探究の手法を小さな単元で集中的に学ぶ仕組み。例：「生成AIの特性やリスクを踏まえた作品制作を行う」。 P77 P251

情報ブロック

「情報の領域」で、探究のプロセスに入れにくい「適切な取扱い」「特性の理解」の内容を独立して学ぶまとまり。3年から6年へ系統的に発展する。 P251

メディアリテラシー

真偽がはっきりしない情報を主体的に吟味・判断し、必要なら判断を保留する力。情報を社会的・文化的な背景の中で批判的に評価し、発信して社会参画する考え方や態度として整理されている。 P248

クリティカル・シンキング

論理的・合理的に考え、自分の考えを振り返りながら、よりよい判断を目指す考え方。情報の吟味に欠かせない。 P248

AIを使いこなす力

単なる操作技能ではなく、AIを適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決したり自分の考えをつくったりしていく力。 P248

プログラミング的思考（再定義）

目的や課題を考え、AIへの指示やプログラミングで解決策を形にし、できたものを論理的・批判的に評価・改善し、責任を持って活用するまでの一連の考え方。 P249

AIエージェント／フィジカルAI

AIエージェントは自律的に目的を達成するAI、フィジカルAIはロボットなどをAIで制御する技術。AIの進展の例として挙げられている。 P248

偽の熟達（false mastery）

AIを使った探究などが一見高度に見えても、実際には資質・能力が育っていない状態。 P330

フィルターバブル／エコーチェンバー

アルゴリズムなどによって自分に合う情報や似た意見ばかりに囲まれ、価値観がかたよる現象。社会の分断を招きかねない課題とされる。 P4 P72

ELSI

Ethical, Legal and Social Issues の略。倫理的・法的・社会的課題。AIが引き起こす新しい道徳的課題の例として挙げられている。 P301

デジタル学習指導要領

ウェブサイトで提供される次期学習指導要領。キーワード検索や系統の確認ができ、生成AIが読みやすい形式のデータも提供する方向（審議まとめ段階）。 P21

数理・データサイエンス・AIのリテラシーレベル

数理・データサイエンス・AIを日常の生活や仕事などの場で使いこなせる力。高校卒業生全員に育成することを目指す。 P74

情報の妥当性の確認

社会科で新しく位置付ける技能。集めた・読み取った・まとめた情報の信ぴょう性を確かめる。 P159

AIドリル

AIを使ったデジタルドリル。質のある教材であること、教師の指導助言、子供が自ら学びを調整しながら使うことが前提とされる。 P177

デジタルデバイド

デジタル技術を使える人と使えない人の間に生まれる格差。デジタル技術の進展を格差拡大につなげない視点が重要とされる。 P4

出典：中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」（2026年10月5日）。P○ は本体PDFのページ、資料P○ は資料編のページ（クリックで該当ページが開きます）。